
ため息

田中由紀江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ため息

【Nコード】

N1203Q

【作者名】

田中由紀江

【あらすじ】

主人公は、憂。待ちに待った文化祭。お姉ちゃんの演奏があるんだけど……、自分のことのようにドキドキしちゃう。お姉ちゃん、大丈夫かな？！

（前書き）

憂の視点で、ちょっとお姉ちゃんの唯を思う心、みたいなのを
書いてみました。

まるで、唯の保護者みたいな気持ちの憂ちゃんです。

くプロローグく

（お姉ちゃん——大好き……）

私は、そっとお姉ちゃんの匂いのするマフラーに、頬を押しあてた……。

第一章 お寝坊なお姉ちゃん

「お姉ちゃんッ、いつまで寝てるの？ 学校に遅刻するよ」

「うーん……」

我が平沢家の朝は、いつもこうして始まる。

「お姉ちゃんったらあー！」

「うーん……、あと五分……、え？」

いつものように、やっと気がついて目覚まし時計を見たお姉ちゃんは、思わず飛びあがったようだった。

「わっ、もうこんな時間?!」

ベッドから飛び降りる。

「もう、憂ったらあ、もつと早く起こしてくれればいいのに」

「何回も起こしたよ。起きなかつたのお姉ちゃんじゃない」

あきれている私の前を突っ走って素通りし、用意しておいたジャムつきパンを頬張りながら、

「ひってひまあゝふ！」

とお姉ちゃんは外に飛び出す。

まったく、一年生のときから全っ然変わってないんだからなあ、お姉ちゃんは。

フウ……、と吐息をついてお姉ちゃんの分の食器を片づけると、

私も外に出る。

本当にいつもの、何も変わったところのない朝である。

「ああっ、憂、ちよっと雨降ってるよ」

唯お姉ちゃんは、そう云っていったん外に出ていたのをやめて、きびすを返すと玄関へ戻ってきた。

「あっ、ホントだあ」

私は、外へ手をかざしてみる。

「今日は雨だね」

お姉ちゃんの黄色の傘と、自分のグリーンの傘を、傘立てから引っ張り出す。何かいつも、私はお姉ちゃんのお守り役みたいなのを、自然にできてしまっている気がする。

「はい、お姉ちゃん、傘持って」

「ありがとう、憂」

お姉ちゃんは、大事なギターのギ―太を両手に抱えて、ジャムつきパンをほとんど食べ終えた様子で云った。

「そういえば、もうすぐ文化祭だね」

「うん」

「憂のクラスは、何やるの？」

「タコ焼き屋だよ」

「ほおほお、いいなあ。我が軽音部も、新しい曲づくりに必死です！」

「頑張つてね、お姉ちゃん」

「うん」

本当に楽しい文化祭になると、いいな。

第二章 文化祭の準備

学校では、明日の文化祭の準備に向けて大忙し！ 親友の純も、今日はあんまり話す暇なしって感じで――

「ねえ、憂」

と、私は、クラスメートの美久ちゃんに声をかけられた。

「ん？」

「あのね、憂はタコ焼きつくる係するの、二時頃になるからね」

「うん、わかった」

「憂のお姉ちゃん、軽音部でしょ？ 今年、どんな演奏するのかなあ」

「楽しみだよ」

私は、ニツコリ笑いながら云う。

「私、茶道部だから、抹茶をたててお茶会もやるんだ。着物も着るんだよ」

「へえ、憂、けっこう似合いそうだよ」

美久ちゃんも、笑ってそう云ってくれた。日本的なおしとやかな美人になりたいって思って始めた茶道部だけど、着物を着るっていうの、日本人なら、とっても嬉しいよね。

私は、まだ抹茶のたて方は半人前なんだけど、でも、やつぱり着物とか着るのって、わくわくしちゃう！

（ええっと……、いつ、茶道部に行けばよかったんだっけ……）

なんて思いながら廊下を通っていると、ちょうどギ―太を抱いたお姉ちゃんがこっちにやってくるのが見えた。

「あつ、お姉ちゃん！」

「憂！」

お姉ちゃんも手を振る。

「何してんの？ 今から軽音部、練習？」

「うん、まあそんなとこだよ」

とお姉ちゃんはニツコリした。

「今年も講堂でライブやる予定になってるから、私も今からリハ―サルっていうか、

ちよつといろいろ見ておかなきゃいけないって」

「そう、頑張つてね、お姉ちゃん」

「憂も、タコ焼き屋、頑張るんだよ」
「うん」

私は、とびきりの笑顔で、うなづいた。

*

そして――

その日の夜、お姉ちゃんはギー太の練習を、リビングでもして
て。

「お姉ちゃん、せいが出るね」

「うん、でも疲れた〜〜！」

と、お姉ちゃんは床に寝っ転がる。

そして、お姉ちゃんは恒例のゴロゴロ転がりを始めたりして――

「憂〜〜」

と云った。

「何？ お姉ちゃん」

「アイス、食べたい」

もう秋だつてのに、またそんなことを云ってる。

「もう夏でもないのに、アイスなんてないよ」

「そう〜〜？！ でも、暖かい場所でアイス食べるのって、けっこ
う楽しくないかな

あ

「いつまでも小さな子供みたいなこと云ってちゃダメだよ、お姉
ちゃん」

と、私は姉をたしなめる。

「まだ早いけど、もう寝てもいい時間だから、もう休んだら？」

「うん……」

とお姉ちゃんは立ちあがる。

「あっ、それと……」

「何？」

と、お姉ちゃんは口を膨らませながら振りむいた。

「明日、私、タコ焼き屋さん二時からやるんだけど……、お姉ちゃんは何時から、

講堂で演奏するの？」

「うん、多分、三時ぐらいから……」

「良かった！ そしたら見にいけるね」

「ああ、そう。じゃあ見に来ておくんなまし」

「うん」

と私はとびきりの笑顔をした。

「必ず行くから、いい演奏をしてね」

「うん」

第三章 文化祭当日

「タコ焼きですよ、美味しいタコ焼きはいかがですかあ」

私は、そう叫んでお客を呼び込みながら、頑張ってタコ焼きを焼いていた。

ジュース、て焦げてるタコ焼きは、とっても美味しそうで、ちよつとパクツッ

て味見したくなったりしちゃう。

頭にはハチマキを巻いたりして、タコ焼き屋さんの雰囲気を出してる私に、いきなり純が云った。

「憂、もう、私が交代してあげるよ。だって、三時からお姉ちゃんの演奏、あるん

でしょ？」

「うん」

私は、ニツコリ笑って云う。

「実は、そうなんだ。ありがと、気を使ってくれて」

「いいってこと」

と、純は、片目をつぶって見せた。

「そのかわり、私が宿題忘れたときは、ヨロシク」

「抜け目ないなあ、もう」

と、私は吐息をついた。

「さあさあ、講堂へ行つてらっしゃい」

なんて、純は云つて。私は、頭のハチマキを取ると、講堂へ出かけることにした。

時間は、二時五十五分。

（お姉ちゃんたちの演奏に間にあうかな……）

私は、校庭に出ると、思わず駈け出した。何としても、お姉ちゃんたちの演奏に間に

あいたい！

「ハアツ、ハアツ……」

息を切らしながら、私は講堂に到着した。扉を開けてなかへ入ると、ちょうど、

お姉ちゃんたちの姿が見えた。

（間に合った……！）

「それでは、今から『ふわふわタイム』を演奏しま〜す！」

と、お姉ちゃんが云った。そして、演奏が始まって。

（すっごい）

私は、びっくりしてしまった。だって、お姉ちゃんたちの演奏は、とても上手で、

まるでプロみたい私には聞こえたからだ。

澪さんのボーカルも、完璧！

「ふわっ、ふわっ、タ〜イム、ふわっふわっタ〜イム♪」

立派に演奏しているお姉ちゃんを見ていたら、つい、涙があふれてしまった。

（よかった……、ホントに）

私、妹なのに、まるでお姉ちゃんのお母さんみたい。

自分でも、ヘンなのって思ったけど、涙が止まらなかった。

だって、あのお姉ちゃんが、立派にギターを弾いて、注目されて演奏してるんだもん。凄いよね。

胸が熱くなって、思わず、ため息。

これからは、お姉ちゃんも、ちよっとは成長するかな？　って、私思ってたんだ……。

（後書き）

最後まで、読んでくださった方、ありがとうございました。
唯と憂のほのほの姉妹愛、楽しんでいただけたでしょうか？
けいおん！ファンの人たちに、この作品を受け入れてもらえると
嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1203q/>

ため息

2011年1月13日07時03分発行